

聖書：使徒 14：1～7

説教題：二派に分かれ

日時：2014年1月26日

今日の舞台はイコニオムという町です。今日のトルコのコンヤ、あるいはコニヤと呼ばれる町に当たります。このイコニオムでは、ピシデヤのアンテオケの時と同じようなことが繰り返されます。しかしその中でも福音を語ることをやめない使徒たちの姿から励ましを受けたいと思います。まず1節：「イコニオムでも、ふたりは連れ立ってユダヤ人の会堂に入り、話をすると、ユダヤ人もギリシヤ人も大ぜいの人々が信仰に入った。」パウロとバルナバはこの町でもまずユダヤ人の会堂へ行きます。前回、「私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます」と言ったからと言って、もうユダヤ人には福音を語らないということを彼らは言ったわけではありません。新しい地に行ってユダヤ人の会堂があれば、まずそこで宣教するという方法は、どの地に行っても変わることはありませんでした。

パウロがここでどのような話をしたかは具体的には書かれていませんが、それは13章で見た説教と同じであったでしょう。1節の、ふたりは「連れ立って」と記されている部分には印がついていて、欄外を見ると、あるいは「同じように」と記されています。これは先のピシデヤのアンテオケと同じようにイコニオムでの宣教がなされたということを意味していると思われる。すなわち罪の赦しと義認の福音の説教です。この結果、ユダヤ人もギリシヤ人も大ぜいの人が信仰に入りました。ユダヤ人も異邦人も人種の違いを越えて、キリストにあって一つ信仰に生きる幸いがここに起こっていたわけです。

その一方で、このイコニオムでも反対者たちの活動が現れて来ます。2節：「しかし、信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対し悪意を抱かせた。」私たちはあのパウロが説教したら、皆が信じるのではないか、彼が行くところではいつも成功だけがあったのではないかと思うかもしれませんが、そうではありませんでした。パウロが福音を語る時、そこにはいつも反対活動も起こったのです。悪意を持って攻撃し、彼を除き去ろうとする反応をいつも受け取ったのです。このイコニオムの信じようとしないうダヤ人たちのやり方は陰湿です。彼らは「兄弟たちに」対し、悪意を抱かせたとあります。兄弟たちとは、この町で福音を信じたばかりの人たちのことでしょうか。信仰に入って間もない、まだ生まれたばかりの信者たちをユダヤ人たちは迫害しにかかったのです。しかも彼らは異邦人たちをそそのかしてそれをさせるというやり方を取りました。このことは救われたばかりの信者たちにとってどんなに大きな試練となったことでしょうか。またパウロとバルナバにとっても、どんなに心を悩ませ、また神経をすり減らされる事態となったことでしょうか。

そんな中での二人の行動が3節です。「それでも、ふたりは長らく滞在し、主によって大胆に語った。主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行なわせ、御恵みのことばの証明をされた。」パウロとバルナバは、信者になったばかりの人たちを放置することができず、迫害の中にある彼らを支え、励ますために、なおこの地に踏みとどまったのでしょうか。このために二人は長らく滞在しました。この状況は彼らにとって居心地の良いものではなく、日々戦いであっ

たでしょうが、粘り強くこの地での宣教を彼らは行なったのです。一体どのようにして彼らはこのようにすることができたのでしょうか。3節に、ふたりは「主によって大胆に語った」とあります。この「主によって」という言葉は、「主に基づいて」とか「主の上に立って」と訳しても良い言葉です。新共同訳聖書はそこをうまく訳しており、「主を頼みとして勇敢に語った」と訳しています。すなわち彼らはこの難しい状況において、主を頼みとし、主に信頼して語り続けたのです。自分の知恵や力ではなく、生ける主により頼んで、一つ一つの働きをしたのです。「大胆に語った」というのは、そこには恐れてしまいそうな状況があったことを暗示しているでしょう。その彼らの信頼に対して、主は豊かに答えてくださいました。3節後半に「主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行なわせ、御恵みのことばの証明をされた。」とあります。ここでパウロの福音が「御恵みのことば」と表現されています。これは彼のメッセージのエッセンスを端的に示しています。すなわちそれは神の恵みのメッセージであった。神は何の功もない者を、ただイエス・キリストにより、恵みによって永遠の命へ救ってくださる。その恵みの言葉が真実であることを、主はしるしと不思議なわざとによってバックアップしてくださったのです。主に仕えて歩む時に、そこに困難はあるけれども、主がこのように助けてくださるといことが示されています。

しかしこれで事は終わりません。1～3節で1回目の嵐は過ぎ去ったように見えてましたが、4節から第二の嵐が彼らに襲いかかります。4節：「ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。」パウロとバルナバの宣教が粘り強く続けられた結果、町全体は福音を信じないユダヤ人の側につくか、それとも福音を宣傳している使徒たちの側につくか、に大きく二分されました。ここで注目したいことは「二つに分かれた」という点です。三つに、あるいはそれ以上に、ではありません。福音を信じるか、信じないかの二つに分かれたのです。中立の立場は存在し得なかったのです。これは福音がもともと持っている性質と言えます。マタイ 10章 34～36節：「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。」福音はこのように人々を二つに分けること、時には家族の間さえも分ける、とイエス様は言われました。私たちはともすると、キリスト教を信じる人と、信じない人という分類の他に、キリスト教に好意的でありつつ信者にはならない人という分類を考えてしまうかもしれません。しかし福音は人々を二つのグループに分けるのです。私たちはこのことを真剣に受け止める必要があるのではないのでしょうか。私たちは知人や友人の中に、キリスト教を信じていないけれども立派な生活をしているから、この人は真中の立場の人だと捉えてしまっていることはないのでしょうか。この人は多くの人から好かれているし、評判もいいし、ある意味ではクリスチャンよりも尊敬に値する人だから、信じなくても神のお恵みがあるのではないかと思っている場合はないのでしょうか。しかし厳粛な事実、福音に対して中立の立場はないということです。私たちはそのことを覚えて、愛する人々の救いのために一層祈り、関わり、仕える者でありたいと思わされます。

さてこうして町全体が二派に分かれた結果として、パウロの反対者たちが力を結集します。彼らは彼らの指導者たちといっしょになって、使徒たちをはずかしくて、石打ちにしようと企てます。その時、パウロとバルナバはどうしたのでしょうか。ふたりはそれを知って、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避けます。これはこの地のユダヤ人の方が結局は強かったということでしょうか。彼らが勝利し、パウロたちは敗北したということでしょうか。3節で彼らを助けてくださった主は、今回は助けてくださらなかったのでしょうか。確かにここに主の助けが全くなかったわけではありません。それは6節の「ふたりはそれを知って」という部分に認めることができるでしょう。パウロとバルナバへの陰謀が実行される前に、ふたりがそれを知ったことに、主の守りがあったと言うことはできます。しかしもう少し何とかならなかったのか、これでは敵が勝利したことになってしまうのではないか、と私たちは思うかもしれません。

しかし今日の箇所にはもう一つ、最後の節が残されていました。7節：「そこで福音の宣教を続けた。」この7節があることによって、今日の箇所のメッセージは大きく変わります。パウロたちの福音宣教は、イコニオムのユダヤ人によってストップさせられたのではなく、なお前進したのです。彼らは確かにイコニオムの町から出て行きましたが、イエス様は前にマタイの福音書10章23節で、迫害されたなら次の町に逃れるべきことを語っておられました。主の日が来るまでに、あなたがたは町々を巡り尽くせないからです、と。その御心に従っただけです。そして出て行った先で彼らは代わることなく福音を語り続けたのです。

それにしてもこの7節を見る時、よく彼らはそれまでと同じように福音宣教を続けたものだと思わないでしょうか。私たちがパウロの立場にあったらどうでしょうか。第一次伝道旅行に出発してから、もう何度も迫害に会いました。キプロス島でも反対活動を受けましたし、ピシデヤのアンテオケでも口汚くののしられ、荒々しく追い出されましたし、イコニオムでは一歩間違えれば石打ちにされるどころでした。こんな目に会わされるのはもう沢山！しばらくは様子を見て静かにしていよう！と考えてもおかしくありません。ところが彼らは何事もなかったかのように、ルステラ、デルベ、その付近の地方で宣教を続けたのです。彼らをこのように語らせたものは一体何だったのでしょうか。二つのことが考えることができます。一つはパウロたちが語っていた「御恵みのことば」です。人はただイエス・キリストによって罪を赦され、神の前に義と認められ、永遠の命を頂くことができる。この福音の素晴らしさをパウロたちは知り、自らが味わっていたので、これを黙っていることなどできなかった。たとえ命を危険にさらされようとも、この福音を伝えないで、地上の命をただ長らえさせようといった考えは彼らに毛頭なかった。そしてもう一つのことは生ける主との交わり、また信頼です。3節で彼らは「主を頼みとして大胆に語った」とありました。素晴らしいメッセージを自分たちは持っているというだけでなく、今も生きて私たちと交わり、助けてくださる主がおられる。その主と交わり、主により頼むことを通して、パウロたちは自分たちがもともと持っていなかった力に支えられて歩むことができた。また主の力強い摂理の御手によって最善に導かれることを確信することができた。事実、表面的にはただイコニオムから追い出されただけのようでありなが

ら、実際にはイコニオムでの宣教がなされ、さらに新しい地での宣教が主によって開かれて行くこととなったのです。

パウロたちはこの後もさらにひどい迫害を受けることを私たちは見て行きます。そうした記述の内に、私たちは福音のために生きることには苦しみが付きものだと改めて教えられます。パウロたちもいつもそうだったのです。しかし同時に私たちがそこに見るのは、そのような状況で福音宣教をやめてしまわない彼らのタフな姿です。それは彼らをそのように支え、守り、用いてくださった主の姿を見ることでもあります。

私たちが主に仕えて歩む時、また御国のために歩む時、様々な困難にぶつかるでしょう。それ自体を見れば、がっかりするような状況に直面することもあるでしょう。しかし私たちは、そのこと自体に驚くべきではありません。大切なことはその状況の中で、私たちがパウロたちのように御恵みのことばにしっかり立つこと、そのメッセージにまず自分自身が生かされていること、そして私たちと共にいて、上から導いてくださる主と交わり、主により頼むこと。主はそのような私たちに、パウロと同じように力を与え、困難を乗り越えさせてくださいます。私たちの思わぬ仕方で道を開き、私たちをみわざのために用いてくださいます。私たちは今週も主のためのあらゆる戦いと困難において、この主を頼みとして御国のための働きを続け、主に用いていただく特権と幸いに歩みたいと思います。